コンソーシアム研究グループ　活動記録
2005 年 6 月 8 日（水）　10:00－13:00
参加者：小野、坂下、伊藤（記録）

１．海外・国内の図書館コンソーシアム研究

前回の研究に引き続き、各自が分担して文献調査、web 調査、聴き取り調査を行った海外・国内の図書館コンソーシアムについての報告を行った。（以下記載のコンソーシアム）

小野　GASCO（複数国のコンソーシアム）、国際図書館コンソーシアム連合：ICOLC,JCOLC について報告

伊藤　日本の公共図書館のコンソーシアムの現状、英国の公共図書館コンソーシアム：EARL 研究大学図書館コンソーシアム：CURL について報告

坂下　九州大学他レファレンス相互支援の現状について、TRIL、ボストン・ライブラリー・コンソーシアムの運営体制（資金、専任スタッフ）について

２．上記１に関する検討・意見交換

・コンソーシアムは電子ジャーナルに関するものが多い

- 英国の EARL は、Ask a Librarian を成立させるために業務研修を行っている。職員のトレーニングが不可欠であるという認識をもっている。この事例は、我々の研究の 1 つのモデルになるのではないか）
- 日本の公共図書館においてコンソーシアムの事例は見つからなかった。公共図書館員にはコンソーシアムという概念がそもそも認知されていない現状がある。
- 日本の大学図書館においてもレファレンスの事例の蓄積はみられる。ただし、チャット的なものではない。日本においてもレファレンス・データベースについてはコンソーシアムが成り立つのではないか（そのために有能な図書館員・司書の養成が求められる。現状では障害が多い）
- TRIL,ボストン・ライブラリー・コンソーシアム、コンソーシアム京都等においては、運営体制（資金、専任スタッフ）がしっかりと組織されている点が特徴としてあげられる。スタッフ教育も活発に行われている。この２つのコンソーシアムについては、E メールで直接担当者に問合せを行うこととする。
- 大学コンソーシアム京都、TRIL の調査を更に進めていく。

３．コンソーシアムが成功するために要素、秘訣について

標記について検討を行い、以下の項目が抽出された。

- 参加館のスタッフに、コンソーシアムの理念、活動内容を継承し、伝え続けることが不可欠である。
- ファンド（資金）、スタッフ（事務局・専任）の運営体制が確立していること

・ コンソーシアムとしての交渉力（＝専任スタッフはマネジメント担当であるのか司書であるのか）
・ コンソーシアムは今後ますます活動の領域を広げていくであろう。それぞれの参加校は目的（用途）に応じて、複数のコンソーシアムに参加していくというスタイルが定着するのではないか

4 次回までの検討事項

以下の 3 点について次回の研究活動までに各自が意見をまとめ報告する。

① コンソーシアム成功の秘訣（不可欠な要素）を列挙する
② コンソーシアムの今後のゆくえについて各自の意見をまとめる。
（a 変化の視点、b.新たなコンソーシアムの可能性、c.人的資源の観点）
③ 今後の研究大会報告、論文執筆の分担、作業の流れについて各自の意見をまとめる。

5 次回のグループ研究活動

8 月第 1 週に、グループ研究を開催する。

以上